
刹那の凶星

A D L T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の凶星

【Nコード】

N9825R

【作者名】

ADLT

【あらすじ】

10歳の時に家族を全員強盗に殺された、、、
それから10年後、
彼は新しい家族を得る、
絶望の底にいる彼は新しい希望を掴める
のか、

この作品は作者が戦国バサラの石田三成を使ってプレイしてたら思
い付いた作品です、

なので一刀の戦闘スタイルを石田三成にしています、
苦手だな〜と思う方は

即戻るを押してください。

血の雨（前書き）

注意、一刀アランチです
共にチートです

血の雨

ザー、、、、、、、、、、、

雨が降っている、

雨の音しか聴こえない、 今何が起きている、

床には赤い水溜まりが出来ている、、

その赤い水の元をだどると、其処には妹が倒れていた、動かない、

指先すら動かない、、

また違う所から赤い水が流れてくる、

またそれを辿る、、

其処には母が倒れていた また動かない、目が開いてるのに、動かない、、

また違う所から赤い水が流れてくる、

また辿る、

其処には父が倒れていた、動かない、あの大きな手で撫でてくれるはずの 手が動かない、、、、、、

みんな動かない、、、、、、みんな赤い水を流している、、、、奥に誰かいる誰だろう、、、、知らない男がいた、、、、手に赤い水がいつぱい付いた包丁を持つてる、、

しばらくすると男は急いで消えた、、、、、、

なんか変な音が聴こえる、、、、雨の音しか聴こえないはずなのに、、

、、、辺りも赤く光ってる、、家族のみんなが白い車に乗せられてる、、、、待つてどこに行くの?、、、、、、、、、、、、

今日の前に母と父と妹の写真がある周りの人達がみんな泣いてる、、

「俺はもう弱いのは嫌だ、、、強くなるんだ、、、誰にも負けな
い程強くなるんだ、、、そしてこんどこそ護るんだ、、、家族
を、、、」

「一刀、、、解った教えよう剣を、、、」

その日俺は変わった、、、

「兄貴、女がいたら好きにして良いですかね？」

「おう、好きにしま、」

「よっしゃ！ たっぷりあそぶぜ！」

「へっへっへさあて、たっぷり奪ってやるぜ」

そう言い男は村を見る、、、、、後少しで恐怖を味わうとも知らず、、、、、、

村

「大変だ！ 賊が来たぞ！ 逃げる！」

「急いで仕度するんだ！ 女子供は先に逃がせ！」

ワァー！

「来た！、急いで逃げる！！」

「おい、、、待て」

「なんだ旅の人か！？ 急いで逃げるんだ！！ 死んじまうぞ！！」

「そうか、、、、奴らは悪なんだな、、、、」「！？、なにを言って

「あいつらが憎いか、、、、」「！？」「死んで欲しいか？、、、、」「あ

あ、、、、憎いよ、殺したい程憎いよ！でも無理だ！！ 勝てつこ

ない、、、、」

いいだろう、、、、」「なっ！？何処に行くんだ！早く逃げるんだ！！」

安心しろ、、、、あいつらは俺が始末しといてやる、、、、さっさと何処へでも逃げろ、、、、」「おい、！！待て死ぬ気か！」

そう告げた男はまるで散歩に行くかのような足取りで賊が来てる方へ歩いて行つた、、、、

「見えたぜ！お前ら村だ！たつぷり暴れな！」

「ウオオオオオオ！」

「アアン？なんだありゃあ？」

そう言い見ると、1人の男かまこちらに歩いて来てる、、、、

「ヘッわざわざ死にに來たか！、、、じゃあ殺してやるよ！！！」

そう告げ賊頭は馬を走らせる、

歩いて來た男は止まる、、、そして自然体の姿勢に変わる、、、前からは馬に乗つた賊頭が迫つて來る、、、だが男は動じない、、、

「ヘッ！怖くなって固まつたか！ヘッヘッへ馬鹿が！死ね！」

そう言い賊頭は男に迫つた、、、だが賊頭は不思議な物を見た、男が右手を持っていた長い劍に添えたと思つたら、不思議な風が吹いた、、、

賊達は不思議に思つた、自分たちの賊頭が獲物を無視して男を通り過ぎた、そしてその通り過ぎた男は見たことがない長い劍を抜いて立っていた、、、

そして男が右手に持っていた長い剣をゆっくりと鞘にしまい、カチン、、、、と音がした、、、、そしてその音が鳴った次の瞬間男の後ろにいる自分たちの賊頭が馬もろとも真つ二つに切り裂かれた、、、、、、

「ヒイツ!!、頭が!!」

賊達は何が起きたか理解できなかった、、、、只1つ解る事は、あの男が自分たちの賊頭を殺したのだと、、、、、、

「来たな、、、、ザツと見て五百か、、、、技の試しに丁度いい、、、、」

そう言った次の瞬間男が消えた、、、、

「何処だ!!、何処行きやがった!!、、、、!!あれ、、、、なんで馬から落ちてんだ?、、、、誰の足だこれ、、、、、、ドサツ、ヒイツ!!」

その絶命した賊の後ろには男が立っていた、、、、あの男が、、、、

「クソツ、殺つちまえ!!」
「ウオオオオ!!」

「喚くな、、、、フツ」

そう言い男は刃を抜いたと同じに宙返りをする、すると賊が宙に舞った、、、、

「クソツ!!困め!!」

そう言い賊が八方から迫る、、、、

「フン、、、」

再び男は消えた、
だが直ぐにまた現れたと思ったら、周りの賊達の上半身と下半身が
二つ別れていた、

「矢だ！！矢を打て！」

「シツ、、、」

再び男は消える

次の瞬間矢を放っていた賊共が真つ二つ切り裂かれた、、、

「ヒイイツ！！何なんだよこいつ！！行け！殺っちまえ！！」

「フツ、、、」

そう言った次の瞬間男が一瞬刃を抜いた、次の瞬間賊達の体に無数の
斬撃ができていた、、、

「ウワーー！たっ助けて！ギヤアアア！」

「、、、その言葉を貴様ら何度聞いた、、、何度頼まれた
、、、貴様らはそうやって罪も無き者達を殺した、、、解るか
？、、、それが貴様らに殺された者達を感じた感覚だ、、、
助かりたいのなら、今までに殺してきた物達に許しを乞え、頭を垂
れる、そして死ぬ、、、」

その言葉の次の瞬間紫色の斬撃が放たれた、、、また1人、また
1人と賊共は死んで行く、、、その多くの者達は自分はいつ死ん
だのか解らないまま絶命している、、、

気付けば既に賊の数は残り100を切っていた、

「やれやれ、技のキレが悪い、修行をここ最近疎かにしていたからな、俺もまだまだだな、其よりも飽きた、終らせるか、」

そう言い男は刃を抜く、

「さあ、怯える目の前の恐怖に、そして己を懺悔しろ、」

男は左手に持っていた鞘を口に加えた、

「刃に咎を、鞘に抗いを！」

その次の瞬間嵐が始まった、鞘に納めた時とは比べられないほどの速さで剣を振る、そして次々に賊の命が刈られて行く、そして男が宙に舞い両手で刀を持ち最後の1人にその刃を降り下ろす、

「それが貴様らの罪だ、」

そう言い刀を鞘に納めた時、彼以外その場所に立ってる者はいなかった、

そして雨が降り始めた、

「血の雨よ、降り注げ、氷雨となって、あの日の俺を射ぬいて殺せ、」

その男は泣いているようだった、

悪が蔓延る動乱の時代、
何を得るのか、、、
彼は何処に行き

設定

バサラ3を知らない方の為に設定説明です。

北郷一刀

7歳の時に家族全員強盗に殺されている、復讐の為に祖父から北郷流居合術を習い14歳の時に免許皆伝された、それからは、暗殺業をしている

武器

長刀 斬鬼

柄は白

刀身に 我斬鬼血染尚鬼斬意味 我が斬るは鬼血に染っても尚鬼を斬り続ける

北郷流居合術

目にも留まらぬ速さで 刹那に斬る
なので斬られた者は自分がいつ死んだか解らないまま死ぬ

技

(戦国バサラ3引用)

断罪

刀を抜いたと同じに宙返りをして敵を斬る

懺悔

一瞬の内に刀を抜き
無数の斬撃を放つ

号哭

目にも留まらぬ速さで前方に移動し横一文字に斬る

斬滅

地面に刀を刺して其処に気を溜めて一気に放つ

鬱屈

刹那の瞬間軌道上の全てを斬り裂く

オリジナル技

斬烈

遠くにいる敵を気を使い斬り裂く

斬刹

目にも留まらぬ速さで敵に近き横一閃に斬り裂く 一撃必殺技

覚醒技

?????

大切な者を傷つけられると発動

てな、感じです

そう彼が告げた瞬間彼は音も無く消えた、、、
「いったい何者だったんだ、、、刹那の内に消えた、、、。」

私は今日の事を一生忘れなかった、、、

大陸に激震が走る、

各地で賊達が次々と殲滅されると言う出来事が起きた。

しかもその賊達を殲滅してるのはたったひとりの青年だと言う。

フラリと現れて刹那の内に賊共を殺し、殺し終わるといつの間にか消えている。

只1つ言えることはその青年の背中に三文字の言葉が入ってた事と彼の事を賊達は凶王と呼ぶ事だ。

そしてその青年の背中には 悪即斬 そう書かれていた。

嵐の前の静けさ

とある料亭。

「おい、餃子二人前頼むよ」

「はい只今！」

「こっちは、炒飯1つ」

「はい只今！って桃香様もぼーっとしてないで、手伝ってください
！、、、桃香様？」

「ねえ、愛紗ちゃん、凶王さん。の事どう思う？」

「凶王？ 確か各地で賊を倒してる、あの凶王ですか？ それがど
うかしたのですか？」

「うん、、、凶王さんはその人達が悪だと分かたら容赦なく殺
すんだって、、、私には凶王さんがなんで悪だと分かたら殺す
のか分からないよ。」

だってその人達にも家族とか大切な物があるはずなのに。

それを只悪だからと言う理由で殺すなんて私には理解出来ないよ、
」

「桃香様、、、」

「ごめんね、なんか暗い話になっちゃって、、、」

「いえ、桃香様の優しさこそこの愛紗感服致しました。」

「華琳様、また悪い癖を。」

「あら、良いじゃない 私は欲しいと思った物はどんな手も使
って手にいれるのよ。知ってるでしょ秋蘭？」

「ええ、存じ上げておりますとも。華琳様のことならば姉者同様存
じております。」

「フフフツ分かってるはね秋蘭、今夜閨に来なさい。たっぷり可愛
がってあげるわ」

「御意」

「あら、そう言えば春蘭はどうしたのかしら？」

「ああ、姉者なら先程から武の鍛練をしております。どうやら凶王
に刺激されたらしく、大量の鍛練をしております。」

「フフフツ頼もしいわね。でも春蘭が刺激される程の男、、、凶
王、、、フフツ今まで男は皆頼りない者ばかりだと思ったけど、
どうやらこの男は違うようね。」

「凶王、、、是非とも会いたいものね。そして必要あれば我が覇道
に入れて見せるわ」

とある城

「おい！、雪蓮！また仕事をサボって酒を飲んでたな！
何度言えば分かる！」

あれ程仕事をサボるなど言ってるだろうー！」

「まあまあ そんな力ツカしないでよ冥林」

「誰の斉だと思ってるんだ？」

「ぶー、あつ、そんな事より、凶王の事なんか分かった？」

「ん？、いやまだ背中に悪即斬と言う言葉が書かれている事と長い見たことない剣を持つてることだけだ。
それがどうした？」

「私気に入ったのよねー凶王の事

だって素直じゃない？只悪と判ったら容赦なく斬るって。かっこいいじゃないそう言うの？」

「まあな、そう言う真っ直ぐな心を持ってもらいたいものだな。何処かの誰かにも、」

「ぶー、ごんなさい冥林今度はちゃんと仕事するわよ。」

「なら今しろ！」

「ぶー、」

そんな話しがされている頃とある村で事件が起きようとしていた。

「凶王か、」

「風ちゃんこの前からそればっかなのー」

「まあ、しゃあないやん、風は一度憧れると。凄く憧れるとやん。」

「そうだけど、あれは憧れ過ぎなの〜」

「せやな」

「おい、真桜、沙和、何してるんだ早く村に行つて竹籠を売るぞ。じゃないと野宿だ」

「は〜いなの〜」

「おう、」

私の名は 性を樂、名を進字を文兼

小さな町の出で。この二人とは昔からの友達だ。私は父から武を教わり強くなって皆を守る為に幼い頃から武の鍛練をしている、その為身体中傷だらけだ。

だが私はその鍛練の末に町で一番強い父を越えた。

そして私は町で一番強くなって父からこう告げられた。

「お前も武を志すなら旅に出て。より多くの人を救つて。

そして良き主を見つけなさい。」

そう言われて私は真桜と沙和と共に多くの人を救つ為良き主を見つける為に旅に出た。

そして旅をしていたある時1つの噂を聞く。

黒天切り裂くその光、
それに乗るは天からの使者、
強き力と信念をもちこの乱世を鎮める。

天の御使いがこの世に現れると。

私は最初半信半疑だったが1つの噂が確信になった。
賊2000をたった一人の男が全滅させた。

私は確信したこんな事が出来るのは天の御使いだけだと。

それ以降彼は各地にて賊を狩り続けて、賊達に凶王と呼ばれている。
悪と判れば即ぎに斬る。それが彼の信念らしい。

実際彼は悪政を敷いていたある町の太守に手を出し殺したらしい。

そんな事は私は到底出来ない。

それ以降私は彼に、、、凶王に惹かれて行った。

「さあ、早く行くぞ、二人とも。」

今私達は作った竹籠を売ろうと目の前の村に向かっていた。

「待つてなの〜風ちゃん」

「せや、もうちょっとゆっくり行こうや。」

「そんな事を言ったら日が暮れるぞ！」

「う〜分かったの〜今行くの〜」

「はあ、ほなちゃんとせんと。早よ行こうや。」

この村での出来事が彼女達には吉とでるのか。
それとも凶とでるのか。

嵐の前の静けさ（後書き）

はい、今回はオリで行きます。メインは凧です さあさあ、一体
彼等はどうなるのか。

出会い 沙和編(前書き)

まずは沙和との出会いです

出会い 沙和編

「とにかく今日中に竹籠を売るぞ。じゃないと野宿だ。」

「野宿はいやなの〜、お布団で寝たいの〜、」

「せやな〜ウチも野宿いやしな〜」

「だったら急いで竹籠を売るしかない、じゃあ一刻後にまた広場で待ち合わせだ。」

「おうなの〜」

「了解や〜」

「竹籠いりませんかなの〜、安いので、う〜全然売れないの〜、このままじゃ尻ちゃんに怒られちゃうの〜、」

「危ない！嬢ちゃん退きな！」

「へっ？ キヤア！」

すぐ真横を凄く速さで馬が通った。

「いたた〜、酷い目に遇ったの〜、あっ！竹籠が。」

さっきの馬を避けた拍子に竹籠が辺りに飛び散ってしまった。

「う〜、急いで拾わなきゃ。」

「スッ、、、、、」

「へっ？」

前を見ると誰かが手を差しのべてくれていた。

「ありがとございますなの、誰だか知らないけど助かったの、」

「いや、気にするな、それよりこの竹籠は君の？」

その彼の手には飛び散った竹籠達を持っていた。

「あれ！？だってさっきのまであそこに転がって、、、、、、」
「個もないの〜!!」

先程まで転がっていた竹籠が一個もなかった。

「良かった君のか。ほら、今度は落とすなよ。(ニッコ)

「(ノノノノノ)！？ (かっこいいの (あのあの名前を教えてくださいなの〜」

「いや、教えるほどの名前じゃないよ。じゃあね(ニッコ)

「(ノノノノノ)ぽーっ、あっ、待ってなの〜」

出会い 沙和編(後書き)

次は真桜です

出会い 真桜編

「ハア、誰もウチのからくり見ようとせえへんな、このままやと
風にならるな」

そう言い目の前からからくりを目をやると、一人の男がいた。

「おー！ 兄さんいらっしやい、どや？このからくり凄いやろ？」

「ああ、まさかこの時代に既にこれ程迄のからくりがあるとわ、
、驚いた。」

「この時代？」

「いや、こちらの話だ、」

そう言い男はからくりを持つと、いきなりからくりが震え出
た。

「あっアカン！！ 兄さん離すんやー！！」

そう告げ。目を瞑ると。 1つの不思議な音が鳴る。

チン、、、、

「ん？、なんで爆発しないんや？」

そう言いゆっくり目を開けると。

そこには真つ二つに成り果てたからくりがあった。

「あれ！？　なんでウチのからくりが真っ二つになってるん！？」

「すまない、爆発しそうだったから、こちらで壊させてもらった、
、代わりと言ったらなんだ、　これを。」

そう言われ、渡されたのわ、約一月は食べて行ける程のお金だった

「へっ！？　エエの！？　こない貰って！？」

「ああ、好きに使つといい。じゃあ、これで失礼する。」

そう言い男は去って行った。

真桜は渡せられた袋を見つめ固まっていた。

しばらくすると動き出しお金をどう使うか考えていた。

「ああ、こんだけあれば、あれが買える、あとあの部品も、エへへ
　　どないしょ」

宿に泊まるためのお金だと言つことを忘れ自分の欲に使つとしてい
る真桜であった。

出会い 真桜編（後書き）

次は凧ちゃん

出会い 凧編

「はあ、あの二人はちゃんと竹籠を売ってるだろうか、、、」
とりあえず私の分を早く売らなければ、

それで二人に合流するか、、、

「竹籠は要りませんか、お安くしますよ」

「今日3回目か、竹籠を売ってる人を見るのは、」

「あつ、いらっしやいませ！竹籠1ついかがですか？」

そう言って前の男性に話しかける。

「いや、今日君以外で竹籠を売ってる人を二人見たからな。」

「（ああ、真桜と沙和か、、、）あの、その二人って巨乳で髪の色が薄柴の女性とメガネを掛けて勘色の女性ですか？」

「ん？、ああそうだが、友達か？」

「はい、あの二人はちゃんと仕事をしていましたか？」

「ああ、ちゃんと竹籠を売っていたぞ、」

「そうですね、なら良いです。」

私は目の前の男性にお礼をする為に立ち上がるつもりだったが、男性に「いや、そのままです」と止められる。

「それよりも。頑張って竹籠を売ると良い。」

「はい、ありがとうございます。」

「じゃあ、俺はこれで。」

「ありがとうございます！」

不思議な人だ、、、ん？背中になんか描かれているな、なんだろう

「おっ良い竹籠だね、1つ貰おうか。」

「いらっしやませー！」

お客さんがきてしまった為私は彼から目を離した。

出会い 凧編（後書き）

三人編はとりあえず終了です。

次回からはまた普通に戻ります

ではまた次回にて。

報い

大体の竹籠を売り終わり 私は二人との待ち合わせ場所に向かった。

「あつ！ 凧ちゃんこつちななの〜」

「ああ、いたいた、、、、真桜！沙和！待たせた、それで？竹籠はいくつ売れたんだ？」

「う〜沙和は5個しか売れなかったの〜、」

「そうか、、、私は半分売れた、真桜はどれくらい売れたんだ？」

そう言い真桜を見る。

「フッフッフ、ウチはなんと完売や！」

「はあ！？、真桜 嘘を言つな、お前が完売出来るわけ、、、な！？本当に無い、、、」

そう言い真桜の竹籠を見たが1つもなかった。

「どや？ウチだってたまにはちゃんとやるんや」

「真桜ちゃん凄いの〜 これで野宿しなくてすむの〜」

「ああ、真桜お金は？」

「ギクツ！ああ〜その〜、これだけ」

そう言われ渡して来た金額はあきらかに少ない。

「?おい、真桜お前売ったお金がやけに少ないぞ、、、まさか、
、、、」

「あはは、、、使いました、、、」

「な!?!、お前このお金が無いと野宿なんだぞ!?!、」

「そうなの、沙和は野宿嫌なの」

「うゝごめんゝつい使ってもうた。」

「全く、、、なんとか三人分の泊まる程の金額が残っていたからまだしも、、、真桜、お前は罰として余ったお金はお前にはやらな
いからな。」

「うゝ、そない事言わんといてなゝ風」

「駄目だ!ちゃんと反省しろ。」

「そうなのゝ真桜ちゃん反省するの」

「うゝ、」

そんな会話をしていると。

「大変だ!!賊がこの村に向かっているぞ!!早く女、子供を逃がす
んだ!!殺されちまう!!」

「な！？、」

「たっ大変なの〜早く沙和達も逃げるの〜」

「せや！！早ようウチラも逃げな！！」

「すみません！賊はどれくらいの数ですか？」

「ざつと見て1000はくだらね！！そんなことより早くお嬢ちゃん達も逃げるだー！！」

「1000か、、、」

「まさか！！風！お前賊と戦つつもりちやうやるな！？」

「無理なの〜いくら風ちゃんが強くても1000は無理なの〜」

「やってみなきや分からないだろ！！せめて村の人達の逃げる時間を稼ぐんだ！」

「でも1000なんか沙和達三人じゃ無理なの〜」

「でも、、、」

「ああ〜！もうしゃあない！やったるは！せめて村の人達を逃がさんやー！」

「真桜ちゃん！？」

「真桜、、、、、お前、、、」

「そうなった風になに言つても無理や、、、ならウチラが風を手

「伝うんや。」

「真桜ちゃん、、、うう分かったの〜！ 沙和もやるの〜！」

「真桜、、沙和、、、ありがとう！！！」

そう言い二人に頭を下げる。

「ええやんか、ウチラの仲や困ってたら助けな。」

「そうなの〜凧ちゃん一人にさせないの〜」

「二人とも、、、本当にありがとう！！！」

「おう！なら行くで！」

「おー！なの〜！」

「頭、村が見えて来ました！」

「へっへっへ、お前ら！久しぶりの獲物だ！！奪い尽くせ！」

「ウオオオオ！」

「ん？頭、なんか村の前に女が三人いますぜ。」

「ああん？へっわざわざ死にに来たか。」

「頭、殺す前にあの三人犯して良いすか？」

「ああ、好きにしな、」

「来たの〜やっぱり多いの〜」

「確かにこれは1000じゃないやろ、、、、あかん逃げとけば良かった。」

「二人とも、無駄な話をしてないで目の前に集中しろ！」

「はあ〜もう覚悟決めるのー！」

「ああ、しゃあない、覚悟決めな。」

「ああ、、、来るぞー！！」

そっ言い目の前から来る賊に集中する、、、だが次の瞬間風が吹いた。

「フ」

「へっ？」

「なっ!？」

「なんや!？」

「凶、、、凶王だ！――！につ逃げる！――！（ズバツ）ギヤア、
、、、（バタツ）」

「ひっ！―！」

「フツ、、、、、、（シュン）」

「へっ？（ズバツ）ガハ、、、、、、（シュン）ギヤア、、、
（ヒュツ）グハ、、、（バタツ）」

「ひっ！！なっなんなんだよ！こいつ！！（ヒュツ）ガハ！（バタ
ツ）」

大量に響く賊達の叫び声と絶望の声、、、、、、そこで行われて
いたのは見えぬ恐怖に怯えた賊達の虐殺だった。

ほとんどの賊達は自分が何時死んだのか分からない内に死んでいた、
、、、そして3000はいたであろう賊達は既にほとんどが息絶え
ていた。

「ひいー！助けて！頼む！俺には家族がいるんだ！俺が稼がない
と妻と子供が生きていけないだ！頼む！！助けてくれ、！」

賊は男に対し土下座をする、、、すると男は剣から手を離す。

「あっありがとうございます！！（グサ）へっ？」

男は不思議に思い顔をあげるとそこには右手に剣を持った男が自分
に剣を突き刺していた。

「お前、確か家族がいると言ったな、、、ならば何故まともな生き方をしなかった、、、因果応報、自分がした事に報いを受けるんだな。」

「ガツガハ、、、（ズバツ）バタツ」

男は賊に突き刺していた剣を抜き賊を殺した。

「本当に家族の事を思うなら賊等せずにもとにも働くんだな。」

そう告げ男は去ろうとするが

「待ってください!」

今新しい出逢いが始まる。

報い（後書き）

遂に我らが一刀が三人に出逢いました！

さてさて一体どうなる事やら、、、

では次回！！

覚悟

私は村の人達を逃がす為に沙和、真桜と共に賊に立ち向かおうとしたが、突如現れた1人の男性により賊達は全滅した、、、

「なっなんなんだ、一体何が起きてるんだ、、、」

「凄いの、、、1人で全部倒しちゃったの、、、」

「ん？あの兄さん何処かで見たような、、、」

「!?!」

「風どないしたん？」

「あの背中 of 文字、、、、、、」

「ん？どれどれ、、、、!!」

「あの文字ってまさか凶王なの!？」

凶王、、、、各地の賊達を殲滅し、悪と判れば即ぎに斬る、、、、天の御使いとも噂されている人、、、、そして私が惹かれていたお方、、、、そのお方が今目の前で賊達を殲滅している、、、、たった1人で、、、、強い、、、、強すぎる、、、、私では足元にも及ばないだろう、、、、私には賊3000なんて数私では倒せない、、、、せいぜい時間稼ぎが良いところだ、、、、そんなことを思っている

既に3000はいたであろう賊達は1人になっていた、、、、

「たっ助けてくれ！俺には家族がいるんだ！！俺が稼がないと妻と子供が生きていけないだ！！頼む！助けてくれ、！」

賊は誇りなど何もかも捨てて凶王に土下座をしている、、、すると凶王は剣から手を離す。

「あっありがとうございます！！（グサ）へっ？」

次の瞬間賊の背中に刃が刺さっていた、、、

「なっ！？」

「家族がいると言ったな、、、ならば何故まともな生き方をしなかった、、、因果応報、、、自分がした事に報いを受けるんだな。」

そう言い凶王は賊から剣を抜いた、、、

「本当に家族の事を思つなら賊等せずにもっと働くんだな。」

そう告げ凶王は何処かに行こうとする、、、そこで私は彼に声をかけた。

「待ってください！」

「なんだ？何か用か？」

「貴方が凶王ですか？」

「ちよつ凧！何を言うてるん！？」

「そうなのゝ危ないのゝ！」

「ん？さっきの竹籠を売っていた子か、何か用か？」

「何故、、、殺したんです。」

「ちよつ凧！」

「ああ、こいつか？簡単だこいつは殺されて当然だからだ、、、こいつら賊は他人の生活を脅かしその人が汗水かいて稼いだ金を奪い、更には己が欲の為に罪も無い人々を殺した、云わば悪、、、こいつらは数多くの人々から死んでほしいと思われている奴らだ、、、死んで当然だろ。」

「ですが、、、では何故一度迷ったのですか？」

「！？どう言う事だ、、、」

「貴方は最後の賊を殺す時一瞬止まりました、、、まるで殺すのをためらうように。」

「、、、、、、、、」

「何故ですか？」

「君には関係ない、、、俺個人の関係だ、、、一瞬黙っていたが、、、空を見上げそう呟いた。」

「凧ちゃんそんなこと聞いたら失礼なのー」

「せや風、どうしたんや？何時もの風ちゃうで？」

「すまない二人とも少し黙ってくれ」

私は見極めなければいけない、、、この人が私の仕えるべき人かを、、、

「答えてください！！」

「お前は家族が殺された事があるか、、、」

「な！？」

「俺は家族を全員殺されたよ、、、十年前に、、、だからどうも家族が絡むとどうやら戸惑うらしい、、、」

「、、、、、、」「だが」？」

私が彼の話の話を聞いていると

「だが例えそいつに家族がいようと俺は全ての悪を許さない！この世に悪がいる限り俺は力が無い者達の代わりに俺が悪を殺す、、、ただそれだけだ、、、」

私は固まった、、、彼の強い覚悟に言葉が出なかった、、、彼の目は強く、そして輝いていた、、、」「（これが覚悟、、、）

「では貴方は例え敵が国の王でも悪であるなら殺すのですか？」

「ああ、それで弱い人々が助かるなら、俺は喜んで国を敵に回そう。」

「なっなにを!？」

「国に1人で戦うなんて無理なの。」

「それでもだ、、、。」

「（凄い、、、私はこんな凄い覚悟はまだ持ってない、、、この人は弱い人々が助かるなら国を敵に回そうとしている、、、この人なら、、、私は、、、）」

「あなた様をお願いします、、、。」

「なんだ？」

「私達の主になってください!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9825r/>

刹那の凶星

2011年4月22日11時15分発行